

## 早春賦をつくった吉丸一昌

大月 和彦

春が待ち遠しい一月二月ごろ、「春は名のみの風の寒さや、谷の鶯 歌は思えど…」と口ずさむ。オヤツ? 「風の寒さ」はおかしくないか、と気になった。暦の上では春だが、風は冷たくまだ寒い の意だが、「風の寒さ」がひっかかる。

早春賦は、安曇野の寒さと春を待つ心をうたった唱歌。文化庁選定の「日本の歌百選」に選ばれている。

歌詞の作者は吉丸一昌。大分県出身の国文学者で東京音楽学校教授。明治42年文部省が設けた尋常小学校唱歌教科書編纂委員(委員長湯原元一校長) の作詞部会主任を務めた。

吉丸が唱歌のたたき台となる歌題案を作り、作詞委員や外部有識者に割り振って作詞を依頼する。各委員がつくった歌詞案は作詞委員会での議論を経て最終案をまとめる。吉丸は歌詞作成の司令塔の役割を果たしたほか、自身も多くの歌詞案を作った。

歌詞の最終案は読本(国語教科書)と整合を図るため、読本編纂の責任者芳賀矢一東大教授の校閲を経て歌詞が完成する。唱歌教科書6冊の120曲はこうして作られた。歌詞は、委員の合議によったので原案の多くは修正される。このため教科書には、歌詞作者を特定せず、文部省の著作とした\*。

吉丸は小学唱歌編纂の仕事が終わると、唱歌は学校でだけ歌うものでなく、家庭や授業以外の場で自由に歌える歌をと「新作唱歌集」を発表した。歌詞は全部吉丸が作り、梁田貞、本居長世、中田章、弘田竜太郎など東京音楽学校出身者が作曲した。早春賦(中田章)、故郷を離るる歌(ドイツ民謡)、楽しき農夫(シューマン)、木の葉(梁田貞)、望郷の歌(成田為三)など。のちの童謡運動の先駆けになったといわれる。

作詞活動を続ける一方、吉丸は私塾の修養塾や夜間の中学を開き、多くの貧しい若者に勉学や衣食住などの支援を生涯続けた。質素な生活を送りながら、豪放磊落で酒を愛したという吉丸一昌は、大正5年43歳でこの世を去った。

\*故郷、朧月夜、春の小川、紅葉の4曲は高野辰之作詞、岡野貞一作曲とされている。両氏の遺族からの著作者認定の申し入れを、昭和42年日本音楽著作権協会が承認したが、この認定には異論が多い。